

ある小学校教員の高度成長期体験(4)

——「青木祥子日記」(1970-1973)を読む——

吉 見 義 明

目 次

はじめに

I. 小学校教員としての体験と教員組合運動

II. 社会運動と政治的立場

III. 経済生活の状態

IV. 日常生活

おわりに

はじめに

普通の人びとにとって高度成長とは何だったのだろうか。また、高度成長期の体験はどのような意味を持つのだろうか。このような関心から、筆者は「ある小学校教員の高度成長期体験——「青木祥子日記」(1960年)を読む」(本誌61巻1・2号, 2019年9月)・「同(2)——「青木祥子日記」(1961-1965)を読む」(本誌62巻3・4号, 2020年12月), 「同(3)——「青木祥子日記」(1966-1969)を読む」(本誌63巻3・4号, 2021年12月)を公表した。本稿はその続編であり, 1970年から1973年までの青木祥子(仮名)の軌跡を明らかにしたい¹⁾。これは, 高度成長期に正規雇用で定年まで働いた, 自立した

1) 引用文は原文のままとしたが, 人名や校名は一部を記号に変更した。引用文中の〔 〕は引用者による註, □は判読不能の文字であることを示す。

独身の女性の経験の特徴の一面を明らかにすることになるだろう。なお、青木は1923（大正12）年4月生まれであり、1970年4月30日には満47歳になっている。

I. 小学校教員としての体験と教員組合運動

教育への取組み

青木は、浦和市立C小学校の教諭だった。この学校は、川口市に近く、学区も広いので、児童の家庭は多様だった。彼女は、作文や図工に力を入れ、児童の作品を投稿・出展する努力も重ねていた。また、自らも原稿や絵画を投稿・出展していた。たとえば、1970年1月28日には児童の詩の「よいと思ったの、男三、女三、封筒に入れ、毎日新聞浦和支局「こどものひろば」係りへ」持っていった。2月6日にはNHK浦和支局から、PTA成人教育委員会がNHK婦人学級をとりあげた活動について書いてほしい、と頼まれている。

1970年の新学年では4年の組を担当した。新学期開始早々に、母親が仕事を持つ家庭の子どもへの影響について、婦人会館で研究報告をしている(4/8)。それによれば、彼女が担任していた前年度の4年のクラスの児童43人の中で26人の母親が家事以外の仕事を持っていた。共働きが8人、パートタイマーが6人（馬券売り場、すし屋、ボーリングセンターなど）、内職が12人（ラジオ・カラーテレビの部品組み立て、ボールペン検査など）で、その多くは授業参観に来ず、家庭訪問でも会えない場合も多かった。児童の中には服で手をふく、爪が伸びたり耳にアカがつまっていたりする、給食用エプロンを洗って来ない、金を与えておやつを買わせる、金遣いが荒いなどの傾向がみられ、子どもの生活に思いやりと細かい心づかいがないと悪影響が出てくると論じていた(4/6)。この報告は『朝日新聞』埼玉版(4/9)にも載った。4月26日のPTA総会では「父兄」に集まってもらって、学

級委員などを紹介したが、参加者は29人で、今までで最高だった。彼女は、『朝日新聞』の効果か、と日記に記している。

彼女は、自分の作文を投稿することに一層力を入れるようになっていた。夏休み中に県立図書館の読書感想文に応募し、10月29日に入選の通知を受けた。第3席の県教育長賞となり、びっくりしたが、「やっぱり、夏休み、あついのに一生けんめいとりにくんでかいた努力がむくわれたとうれしい」と記している。

絵画の作品も自慢だった。10月31日には校内に作品を展示した。その時の模様をつぎのように記している。

一じかんめ、体育、(中略)二じかんめ、国語、「ものにはどうして名前があるか」をやり、三じかんめ、また飾りつけをやり、そのあと、子どもたちにPTA展示室みにやらせ、みんなが作品をみる。「さすが、青木先生さすが」などといって、てれくさかった。

いささか自己顕示が強くなっているように見える。この頃、教員生活への疲れと不満も出始めていた。11月4日にはこう書いている。

二日つづきの休みのあとは、学校に行くのが辛かった。一日がこんなに有効に使えるのと思ったら、学校で毎日貴重なよじかんをとられているような気がする。でも働かねば、お金がもらえないし、何とか生活のめどがみついたらやめたいが、こう物価高ではたいへんだしなあ。

自分のやりたいことと教員という仕事との矛盾を強く感じるようになったのだ。これまで楽しかった校内の図工指導研究会も退屈になり、いねむ

りすることも増え、「いねむりばかりしてだめだ」と、みんなの前で先輩の教員から歯に衣きせずきめつけられることもあった(12/9)。この頃、市議員への立候補を打診されたようで、そのことを兄に相談したら、あまり激務ではないし、いいだろうといわれ、「月給8万の由。考えてみよう」と書いている(12/20)。

教員組合に対する態度

教員組合運動についてはどうだったろうか。1月28日には、地区の役員選挙に関するブロック選対をエスケープした。月曜に分会会議、水曜にブロック選対、金曜に執行委員会と、週に3回も拘束されてたまらないし、美術映画をみたいから、というのがその理由だった。2月13日にはつぎのように記している。

四じ半から分会会議やれということになり、ユーウツ。(中略)第二波ストのための分会の意志決定(全く他人のことだと思うけれど)のため。分会をおわり、六時すぎ。組合なんかやめたくなる。(中略)私にとって組合とは、まあ、仕方がないつきあい費と思っても、こんな毎日のように、木、金、土と連ぞく組合のために時間をさかれ、おまけにまた2/25の第二波とうそうなんて、ちっとも必要かんでも抵抗感も感じないようなことのために、30分授業カットなんて、私にすればナンセンスもいいところ。時間——個人の生活を圧迫されることの方が、とても、とても辛い。

日教組のストライキ方針が自分の利益や自己実現と関係なくなっていると感じられ、組合活動に不満がつのっているのだ。2月23日の執行委員会についても「朝よりユウウツだったが、全員三短ががちとれてよかった。

万ざい! 2/25ストもしなくてすんでよかったなあ。ほっとする」と記されている。また、5月1日には、浦和の統一メーデーに年休を取って参加するよという組合の指示に対して「とんでもない」と反対の気持を記している。

それでも、卒業式の君が代斉唱・日の丸掲揚問題では、原則的な立場にたっていた。3月10日の臨時職員会議では、市会議員の祝辞を求める件が提案され、賛成16、反対15で可決された。しかし、君が代斉唱の票決では、H・S・K・O・Yの5人の教諭とともに青木も立って反対意見をのべ、25人が反対し、斉唱せず、メロディーも流さないということになった。彼女は、C小も変わり、「時代も変わった」と感じている。

教育への順調な取組み

1971年には、『朝日小学生新聞』に出した「子どものおこづかいについて」という小文が全国全5席の入選者の中に入った(1/18)。その翌日の授業参観では、「テレビと勉強」というテーマでお芝居風にやってもらい、この劇のねらっていることについて話しあった。その後、4時まで懇談し、自分の入選のことも母親たちに告げて、得意だった。卒業式では「先生になってよかったなあ」という実感を持てるようになった(3/25)。

新年度も4年の担任になり、学年主任にもなった。この年は転入生が多く、クラス編成が終わったのは5月になってからで、大変だった。授業の模様をみると、11月26日の図工研究会の授業がつぎのように記されている。

子どもは呑気なものだ。でもかくときは一生けんめいに、しずかにかいてくれて、本当にたすかった。また、中々子どもらしい夢をふくらましてくれて、いい作品ができた。そのごの研究会でもおちころび

のない、しずかな授業だったと、T先生にいわれた。もっと冒険をして……とのS先生のしつもんにも、〔 〕小さいときから知っているので、小付属時代も優秀な生徒さんだったし、青木さんのこと身びいきにかわるわけではないが、たいへんおも白い授業のすすめ方、欲ばっていたかもしれないが、青木さんなら出来る人だし、子どもの美しい、平和な意よくを育てることと、技術面の指導と両方ねらったのだから……」と、肩をもってくださった。またとはなく研究会ももり上って質の高い研究会になり、よかった。

いい授業だが、冒険が少ないということであろう。この年も児童の西暦2000年の絵が入選したり（9/1）、創作童話が小学生新聞に載って母親から感謝されたりして（12/25）、順調だった。

教員組合への不満

教員組合関係では、1971年にも、1人平均9000円の闘争資金を積み立てることに不満を感じ、組合を「ぬけようかしら」とも思っていた（7/12）。また、早朝30分のストライキにも反対し、朝の集会も欠席した（7/15）。この姿勢は以後も変わらなかった。1972年にも執行委員を続けていたが、ストライキ方針と闘争資金積立に対しては反対している。「ちよくちよく斗争をするより、ここ一発というとき（□□□□勤務評定など）やるのはいいが」というのが彼女の意見だった（6/26）。

男子児童たちの反抗

1972年の新学期には5年の担任となり、学年主任にもなった。作文や絵画にも力を入れ、夏休みに青木が書いた「県民の日」の投稿文「県民性について考える」は、第一位となり（11/7）、知事賞をもらうこととなった

(11/14)。この点では順調だった。

しかし、新しいクラスでは、彼女の言うことを聞かない男子児童が増え、学級経営がむずかしくなった。問題は、11月2日の遠足の時に爆発した。7人以上の男子が、歩きながら小柄な青木のことを「コビト、コビト」と揶揄しつづけたので、青木がふたりの児童をぶったのだ。

6日には男子の児童たちが、「学級会やろう」といってクラスをリードし、なぜ青木先生はふたりの子をぶったのか、なぜ女子ばかりをひいきにするのか、と追及した。これに対して彼女は、人をバカにする子には教えられない、といってその日の4時間分を自習にし、黒板に「先生をひやかしたり、馬鹿にするような人は、学校にこなくてよらしい」と書いた。これは青木の県への投稿文の入選の知らせが届く前日のことだった。

これに対して、関係する男子児童の母親たちが青木と校長に抗議した(12/6, 12/8)。そこで、母親たちと青木・校長との話し合いが12月9日に行われた。青木は、7人以上の児童が「コビト、コビト」と言い続けたこと、算数の時間に児童たちが「体育、体育」といって白紙答案を出し、外に出てしまったことを訴えた。これに対し、子どものことは悪かった、親の不注意であり、今後よく気をつけたい、という母親の意見もあった。

しかし、出席した他の多くの母親たちは、新学期のはじめに年間の目標や、どのような学級づくりをするかという話がなかった、懇談会で青木は自分の宣伝ばかりしていた、「遠足の時も他の組はみんな男も女も先生を囲んで、まるくなってたのしくやっていたのに、青木先生は女の子といっしょで、しゃんをとるときだけ男の子もいっしょになり、あとまたわかれてしまった」、もっと先生と児童の会話がほしい、などと抗議した。

これに対して、青木は泣きながら、私の不徳の致すところと謝った。しかし、これは母親たちのイジメであり、「こういうクラスをうけもったの

が私の不運とあきらめている」とも記している²⁾。それでも自らの学級経営の能力や指導力の不足を痛感せざるをえなかった。

もっと早く、やはり三年におりるんだっとなあと後悔する。音楽さえできれば、三年でも、一、二年でもいいのだが、音楽ができないし、体育ができないし、困ったなあ。来年の夏は、社会主事の講習を受けて資格をとり、転身したい。50才で、または新聞社でもいい、教育の場面——担当にでもしていただけたら。来年、(中略)私も六年の学年主任は重にだし、おりよう。とにかく、心をいれかえて、月より日からやって、メンツもばんかいしなくちゃ。(12/9)

高学年のクラスをもつ自信をなくしているのである。出張が多いから授業が進まないのだと母親たちからいわれたため、校長からは授業をしっかりとやるように注意された。少し早く帰ろうとすると「授業の方は大丈夫か」といわれている(1973/2/28)。それでも、新年度の担任は6年を希望したようだ。

しかし、その後も、児童の父親から校長に、青木のクラスはバラバラだ、6年になって大丈夫かという電話があり、あなたはよほど悪く思われている、と校長からいわれている。このため、彼女は「こんりんざい6年なんかもつまい」と思った。校長もその方が利口だということで、泣いて担任希望を書き直した。こうして、彼女の念願の6年担任は実現しないこと

2) 1973年12月には、千葉県の小学校の若い女性教員が焼身自殺するという事件が起こっている。彼女の夫は「父兄のつるし上げをくった。学校を辞めたい」という訴えを妻から聞いていたといい、校長は父母とのトラブルがあったことは認めたという(『読売新聞』1973年12月19日)。このようなトラブルが各地で起こりはじめていたのであろう。

になった。いっそ退職して預貯金で暮らしていこうかとも思ったが、1971年のドルショック以降のものすごいインフレの下では不安なので、思いとどまり(3/23)、定年まであと5年がんばろうと思った(3/29)。

こうして、新学期には4年担任となり、学年主任もおりた。しかし、反抗する男子児童は新4年生の中にもいて悩むことになる。

授業中もおしゃべりばかりしている男の子が多く、頭にくる。掃除はサボるし、先生の悪口ばかりいっているA、S、Fなど、全くいやな組だ。(11/19)

3じかん授業。のどが痛かったけれど「とべとべホタル」などよんであげ、そうじもきびしくみて、またK、Y、S、T、N、Oの6人が秘かにプレハブ〔校舎〕へ行った。あとをついていって、やめさせ、帰宅するようにいったが、本当に、昨日のきょうだというのにとこまでいうことをきかない子なんだろう。にくらしくなる。Mくんは、きょうは神妙に、私にいわれたものだから、廊下一かいだんをやっていたが、例によってA、にくらしいたらない。「ウルセエ。バカ」と。これが教師に対することばか。情なくなる。もう、あしたから無視しよう。(11/20)

男の子の母親からも、子どもが勉強しなくなったのは青木のクラスになってからだという電話が校長にあった(12/13)。青木はこの時も体罰も加えたようで、Fの母親にあやまり、「私も体罰は加えないようにしましょう。あと3か月の辛棒だから。来年は3年にさがるか、1年について音楽をだれか若い人に出てもらおうか」(12/14)と記している。反抗する男子児童と抗議する父母を前にして、これまでの教育は行き詰まり、自信喪失の状

態となったのだ。

教員組合に対する不満の蓄積

教員組合運動では1973年4月27日にゼネストに突入することになった。市教組396人中200人近くがストに入ると聞いたが、彼女はストに参加しないことを決めた。「40代まで組合に残っているだけでもたいへんなことなのだから、それで許してほしい」と思った(4/26)。勤務校でのスト参加者は組合員16人中11人だった。

それでも、教員組合運動に全く参加しなくなったのではない。5月21日には、浦和駅西口での小選挙区制反対のピラまきに参加している。しかし、教員組合への不満は続いていた。12月5日のボーナス支給日には、支給された34万円余から、組合費1950円、闘争資金7000円(冬のボーナスからの支払いは4000円)が差し引かれたことが割り切れなかった。とくにこの年は和解もでき、ストも賃金カットされないように30分以内としたのに、闘争資金が何に使われるか説明がない、「だから組合やめたくなる」と記している。不満はつづいていった。

Ⅱ. 社会運動と政治的立場

社会運動への消極的姿勢と革新的意識の持続

青木はベトナム反戦運動にほとんど関心を示さなくなった。1970年には、アメリカのカンボジア爆撃についても、これでカンボジア旅行に行けなくなったと感じただけだった(5/3)。「ベトナムに平和を！ 市民連合」(ベ平連)のジグザグデモを浦和駅前でみた時にも「なぜジグザグデモをしなければならないのか。安保反対というしずかな行進でもいいのではないかとぎもんに思った」と記している(6/20)。社会運動への参加に消極的になっていた。

それでも7月17日には家永三郎教科書裁判の勝訴判決を聞いて「東京地方裁判所判決きまる。家永教育裁判，教授全面勝利!! 文部省しぶいかお。教科書けんえつ違憲!」と喜んでいる。8月8日には，大宮市民会館で丸木美術館の原爆の絵の映画をみたあと，丸木俊，松岡洋子，清水澄子の講演を聞いた。だれも手をあげないので，最初に発言し，丸木の色紙をもらっている。8月23日には，アメリカで女性たちが，人工妊娠中絶の自由，24時間制の無料育児所の設置，就学・就職の男女差別撤廃を要求してストライキをするとのニュースを聞き，好意的に書き留めている。12月21日には，沖縄で米軍がひそかに備蓄していた毒ガスの撤去問題を知り，「全く高圧的に出たアメリカのしせいに腹が立つ。人権無視もいいところだ」と怒っている。

1971年には，NHK浦和支局のカラーテレビで「七〇年代アメリカの未来(2)」という番組を見ている。「ウーマンリブ運動をすすめている女性，OL(旦那さんもいる)，ニューヨーク，ワシントンのハーレム黒人の人種もんだい，性氾濫(けい口避妊薬がすぐうれてる)，性転換も可能になるだろう」ということに注目している(2/24)。この視点がどのように発展していくのかはまだわからない。

政治問題に対する革新的姿勢はその後も継続していた。6月17日には，沖縄返還協定調印式について，復帰はうれしいが，基地もVOAもそのまま残される，と屋良朝苗行政主席が言った気持ちもわかり，やはり批判的にならざるをえないと書いている。中国の国連加盟を求めるアルバニア決議案が可決され，中国の国連加盟が決まったことを知ると「万歳!」「本会議の佐藤首相の答弁をきいていて情けない。いきどおり。へりくつつかない」と思った(10/26)。1972年7月には埼玉県知事選で畑和候補が10万票近い大差で圧勝した。「県民不在の政治から住民福祉の政治へと大きく転換。よかったなあ」と書いている(7/3)。9月に横浜で闘われた米軍戦

車の輸送阻止闘争にも注目していた (9/19)。

他方で、社会運動に対する傍観者的な態度がめだつようになった。1971年3月3日には成田空港の強制代執行をみて「悲劇的だなあ」と記している。また、皇室に対する尊崇の態度も変わらなかった。4月29日の昭和天皇誕生日には「天皇七十才、古稀の祝いの由。推古天皇^マ〜^マにつづいて三代目(在位中に古稀を迎えた天皇は)の由。この秋はヨーロッパにお出かけとか。元気な方だ。幸せな方」と記している。

1973年になると、社会運動に対する悲観的な見方が目立つようになる。たとえば、3月には、国鉄の順法闘争に対する電車利用客の反発が強まり、上尾・上野・大阪東淀川駅などでトラブルや暴力的行動などが生まれるようになった。青木はつぎのように書いている。

とうとう憂慮されていた事が、おこるべくしておこったという感じである。これで国鉄運賃の値上げなどとてもないことだ。もう何回もこうたてつづけに電車や列車が遅れたり運休したりでは、かなわない。私など幸い自てん車で通勤して、自分の足もっているからいいようなものだけれど、国鉄でいかなければならない人にとっては、たいへんなことだ。政府も国鉄の^マ労資の話しあいも、もっと何とかならないのか？ 乗客にこんな迷惑をかけてのとう争にはついていかれない。(3/13)

高度成長期に発展した労働運動のあり方が根本から問われるようになったのであり、彼女もそのことに気づきはじめていた。

独身婦人連盟と「女の幸せ」

1968年に加入した独身婦人連盟(独婦連)では、青木は理事になってい

たが、次第に重荷を感じるようになった。1970年1月11日に下丸子で開かれた理事会には参加したが(前年11月, 12月は欠席), 交通費も時間もかかり, 「よっぽどのギセイ的精神がなければできないことではない」ので, 今後は「もう当分いかないことにしよう」と記している(1/11)。

4月29日に開かれた関東支部結成準備会(渋谷)では幹事になった。関東支部(236人)は11のグループとすることになった(関東支部長大久保光子・広池秋子, 事務局長東山政子に内定)。青木も役員に推薦されたが, 公私にわたり忙しいと断わった(5月17日の関東支部結成大会では議長をつとめている)。8月29日には独婦連のメンバー7名で秩父に一泊旅行をした。10月12日には, 6名で『週刊新潮』記者のインタビューを受け, その後バー「ハンター」で歓談した。「楽しかったなあ」と記している。11月3日には独婦連城北グループで笠間に行き, 12月24日にはクリスマスパーティーを開いた。

1971年3月20日の城北グループの集会では, 結婚してメキシコに行った会員のことが話題になった。独婦連のことが報道され, お見合いの申し込みが来るようになり, メキシコからバイヤーとして来日した日系人と会ったMが結婚してメキシコに行ったのだ。彼女はお祝いしたが, 内心は複雑だった。10月31日には城北グループの集会後, メンバーの一人からマンションによばれ, いろいろ話しあって泣いた。「二人とも主人との不幸。まだ私の場合子どももないのだから, ただ早くわすれて思いきり, ひとり□□で生きたことはよかったと思うけれど」と書いている。

その少し前に彼女はTという男性とお見合いした。しかし, 「これ以上親しくすると, どうにかなってしまいそうで, それに学校やめてきてくれないかなんていわれるとやっぱり今の方が自由でいい」と考えて, 断った(2/14)。

1972年には独婦連メンバーのNが結婚することになり, 再びショック

を受けた。「Mさんといい、Nさんといい、良縁をそれぞれ得られ、お幸せそう。やっぱり私もけっこうしたいとしきりに思った」(10/24)。1973年にも、友だちとの会話をつぎのように記している。

女の幸せって何かしら。——私がやっぱり愛する男性に愛され、そしてその人の子どもを産み、二人して苦労して育てる。——そこに女の人のよろこび、幸せがあると思うといったら、祥ちゃんでもそう思うの。私みたいに平凡な女にはそれしか望めないし、また、望んでも得られていないけれど……と意外なかおをされた。(12/2)

青木にとっては、愛されて結婚し、家庭に入り、子どもを産み、夫婦と一緒に苦労して育てるといって、高度成長期の日本で一般化する近代的な家庭の中で、割り振られたジェンダー役割を果たすことが変わらぬ理想だった³⁾。

彼女にはつきあっている恋人がいたが、結婚はできそうになかった。1970年2月2日には、NHK教育テレビの「婦人学級 新家庭論①」をみて、五代利矢子の「けっこうしてからの方が伸び伸びと自由な気持ちになり、心配した娘時代との断絶もなかった」という話や、東山千栄子の「明

3) フランス文学と歴史学が専門の西川祐子は、青木とは少し後の世代だが、1977年頃にフェミニズム女性学が登場したときに、強い違和感を抱いたという。その理由のひとつは、「旧民法の家族制度を知っている女性史世代にとって、女性解放のゴールは近代家族と共稼ぎ夫婦」だったからだとし、目標としてきた近代家族を女性学の人たちが批判してくるのだから、理解できなかったのは無理もないだろう、とのべている(西川祐子・上野千鶴子・荻野美穂『フェミニズムの時代を生きて』岩波現代文庫、2011年、81ページ)。高度成長期における青木の目標は近代家族と「専業主婦」、西川の目標は近代家族と共働き夫婦だった、ということになる。

治のころは、恋愛はいけないこと、野合と思われていた」という話を聞いて「私もがんばらなくちゃあ」と記している。結婚は相変わず重要な目標だったが、思うにまかせず、「ああ、ゆううつ。楽しみと苦しみのないまぜ。男いらぬ世界になかなかないでもない私」(12/28)という状態が続いていた。1973年からは新しい恋人との交際がはじまったが、今度も結婚はできそうになかった。

Ⅲ. 経済生活の状態

青木は、1970年1月1日付けで昇級し、2-26号俸になった。本俸があがったため手取りもいくらか増え、6万8000円をこえるくらいになった。「ありがたいことだ。六万五千円貯金」と記しているように、生活費を節約して、月給の殆どを預金している(1/21)。こうして、三井信託600万円、安田信託60万円、山一証券6万円、八幡製鉄6500株(34万円くらい)の預金等があり、合計で700万円になったが、定年までには1000万円にしたいと念願していた(1/22)。

2月23日には、貸付信託に10万円預金し、以後毎月10万円ずつ預金することにした。10月21日には月給がはじめて7万円を超えた。しかし、所得税・住民税などで8000円以上さしひかれてしまうのが辛いと記している。

このように、彼女は旺盛に預貯金を増やしていったが、その背景には老後の不安があった。12月5日に支給されたボーナスの手取り20万2500円は何に使おうかと考え、小学館古典文学全集の『源氏物語』を買いたい、カラーテレビが欲しい、炬燵布団のカバーをかけたい、黒のハンドバックがほしい、冬のズボン一着をかう、という案を挙げている。このうち、ハンドバックは恋人に買ってもらうことにした。テレビは故障していたが、家庭教師をしていた隣家から2週間も借りて、ひんしゅくを買っていた。かなり極端な節約生活だったことがわかる。1970年の大きな支出は4月29日

に2万8000円で買ったブリヂストンの婦人自転車だった。家庭訪問にも早速使えるのでよかったと記している。カラーテレビは、ようやく1971年2月に買った(16インチ, 9万4000円)。

1971年末の収支決算については「おおよそ収入三〇〇万円, 貯金二二四万円, 生活七〇万。病気せず, 働けてありがたかったとしなければ」とある(12/31)。預貯金は順調に増えて行った。他方で, 年末のボーナスから税金(12%)のほかに, 組合費(1360円)・闘争資金(2000円)が引かれたことに強い不満を感じていた(12/4)。

1972年12月のボーナスは, 所得税12%を引かれて手取りが26万円になった。ここから日教組闘争資金8000円がとられることは「怒りをぶつける相手がなくて, くやしい」と思った。また, 野村証券で国債9万8700円を買ったが, 野村のボーナスは30歳で87万円と聞いて「いやになる」と記している(12/5)。それでも, 定収入があることはありがたかった。

今日, 給料ただけありがたいと思う。定収入があるのは本当に心づよいことだ。やっぱりがんばって働こう。こんなにインフレになるのでは……。十六年前の千円, いま一万円のねうちだという。だから貯金していてもつまらない気がする。しかし, 土地をガバツとかうほどお金もないし, やっぱりお金をつむよりしかたがない。でも, 何年かあとなんて, どんどんインフレになるのでは, やはりおいしいものを食べ, よい本をよみ, よいものをみて, あまりケチケチせず, 生活を楽しもう。(12/21)

このように, 高度成長末期の1972年頃には, インフレが進む中で, 預貯金ばかり増やしてもだめなので, お金を使って, グルメ, 読書, 演劇・映画・美術鑑賞など生活を楽しもうという姿勢が, より強く現れ始めてい

た。

1973年にも、預貯金は続けていた。2月23日には月給を手取りで10万4460円もらったが、このうち10万円を預金した。新しい貯蓄目標は1200万円とした。こんなに預貯金をして、どうして生活するのかというと、預貯金・国債・社債の利子、原稿料、家庭教師代、水彩教室のお礼などを生活費にあてていたのだ(2/21)。経済的に安定しているが、その中でのごりごりの節約生活だった。

IV. 日常の生活

どのように生きるか

青木は、1970年1月17日に浦和一女同窓会の新年会に参加し、老年の会員から「人げんも75才までは旅行もできるが、あとはだめ」と聞いて、自分の残された時間は「あと20年だ」と感じている。残された年月で、どのように充実した人生を生きるかを考えはじめていた。

すでにみたように、本を読み、感想文を書き、それを新聞やミニコミなどに投稿することを楽しみにしていた。1月8日には船山馨『石狩平野』を読んだあと、感想文を書いた。「だれかがいつかはよむだろうという期待があるからたのしい」と記している。

この年に読んだ本は、円地文子『朱を奪うもの』、山本周五郎『樅の木は残った』、森鷗外『雁』、庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』、三島由紀夫『春の雪』・『憂国』、大原富栄『婉という女』、清岡卓行『アカシアの大連』・『朝のかなしみ』、井上靖『月の光』、芹沢光治良『われに背くとも』、村山りう『源氏物語のすすめ』上・下、福田政義『源氏物語の舞台裏』、『源氏物語絵巻』、『源氏の姫君』、岡部伊都子『美しさを求める心』、荻野末『ある教師の昭和史』、楨皓志・井口文秀『しろいさぎ、しろいわた』、田中澄江『子に詫びる』、曾野綾子『誰のために愛するか』、幸田文『流れ

る』、森本次男『木曾路の旅』、佐多稲子『重き流れに』、もろさわようこ『信濃の女』上巻、などだった。11月25日には三島由紀夫が自決したが、「惜しい作家を失ったと思う」と記している。

また、彼女は、母親読書会と水彩教室を主宰していた。5月9日には県展への作品搬入をしたが、自分の描いた「婦人像」がいい位置に掛かっているのをみて喜んでいる。

6月10日には、『朝日新聞』「ひととき」欄(6/2)の田中多恵子(42歳、会社員)の投稿「ハイミスは戦争犠牲者です」を読んで、「ハイミスの訴えを読んで」の原稿2枚を書いた(内容不明)。田中は、40代の女性の結婚難(男ひとりに女トラック1台分といわれた)と世間の無視を訴え、40歳女性定年制を実施する会社もあることを挙げて、どう対処したらいいのかと訴えていたが、この投稿に深く心を動かされたのだろう。

8月21日に清岡『朝のかなしみ』を読んだ時にはつぎのように記している。

充たされない。私も逆の立場で肉欲から朝のかなしみを味わう。そして、たくさん仕事の中になしみを忘れていく日常。共通なものを感じる。48才なのに、若い美しい女性求めている。しゃくだ。

自らの欲望が満たされない悲しみと、それを仕事の中で忘れていく日常に共感しながらも、若く美しい女性を求める男性の主人公に苛立ちを感じているのだ。

1971年10月2日には、県知事賞をねらって、母親読書会についての文を投稿している(10/2)。これは入選し、再び教育長賞をもらうことになった(12/7)。1972年に書いた山崎朋子『サンダカン八番娼館』の読書感想文は埼玉県議会議長賞を受賞した(12/23)。また、有吉佐和子『恍惚の人』

の感想文を埼玉新聞社に投稿している(10/2)。

1972年の母親読書会では、水彩教室の先生に「なにかひとつのことをしていたら、[あなたは]きっと名をなしたのに、惜しい」といわれているが(11/27)、多才な能力がありながら、それを上手に結実させていないという思いが青木にはあった。このような中で、1973年には、つぎのように記している。

私もお金を残して死んでも、あまりいいことにはならないから、せいぜい生きているうちに自分のやりたいことをやって死にたい。あと、本を1さつ出版したい。カナダ旅行にいったら、あと外国旅行一応ピリオドをうって、少し旅行記をまとめたい。(7/23)

自分のやりたいことをやって死にたい、という思いが強くなっていることがわかる。読書に関する本を出したいというのが念願のひとつだった。自由学園卒であり、毎年同窓会に参加し、羽仁説子からは励ましの手紙ももらっていることもあり、1972年12月25日には、来年自費出版の本を出したいので、序文をお願いしたいという手紙を羽仁に出していた。

外国旅行では、毎回絵日記を書いている。1973年8月にはカナダ(バンクーバー・バンフ)・アメリカ(サンフランシスコ・ロスアンゼルス・ホノルル)に1週間旅行しているが、この旅は観光旅行の域をでていないようだ⁴⁾。

おわりに

彼女は、小学校教員として、とくに図工指導・国語指導での力があり、児童やその父母から一定の信頼をかちえていた。しかし、各種のコンテス

4) 「カナダ、アメリカの旅」というスケッチブックが残っているが、内容はスケッチだけであり、紀行文は書かれていない。

トや作品展での入賞をねらった自分の作文・絵画に力を入れすぎ、学級経営がおろそかになっていた。その問題が1972年・1973年に爆発し、男子児童の反発や体罰問題に発展した。この頃、荒れる学級や父母の抗議で自殺する教員も出はじめていたが、彼女は、この問題に十分に対処できなくなっていた。

教員組合運動に対する不満と疲労感はさらに深まっていった。また、日記にはベトナム反戦の動きの記述がほとんどないのが印象的である。学校内で管理職の統制問題についての記述もほとんどなくなっている。自由学園や羽仁説子との関係は続いていた。

経済的な安定は持続していた。また、儉約生活も続いた。他方で、1971年のドルショック、1973年のオイルショックにともなうインフレへの懸念、一部の母親たちとの対立、独婦連の仲間の結婚などから、生活をもっと楽しもうという思いが一層強くなっていった。

女性の生き方として、同時代のウーマンリブ運動や海外のフェミニズムに注目しているが、実生活との関係はないようである。それは、「愛する人との結婚」と退職・「専業主婦」化を理想とするジェンダー観に変化はないからであり、新しい生き方を肯定的かつ積極的に模索しているとはいえないようだ。

もっとも注目されるのは、頭は革新的だが、実生活ではいまの生活を楽しもうとする発想、つまり生活保守主義が彼女のような日教組の組合員の中にも定着しはじめているということであろう。

付記：本稿は「女性の日記から学ぶ会」（代表、鳥利栄子氏）の2022年3月23日例会（わいわい日記塾 第124回）で発表した「青木祥子日記を読む 1970-1972年」に加筆したものである。日記の筆者と、日記の所蔵者である鳥代表と、ご批評をいただいた「女性の日記から学ぶ会」のみなさまに厚くお礼を

申し上げたい。なお、本稿は日本学術振興会の科学研究費助成事業・基盤研究 (B) 15H03243の研究成果の一部である。